

研究ノート

# 実習前評価システムにおける 面接技術試験の効果の検討 —面接技術試験を受けた学生の自己評価と クライアント評価との関連について—

Examination of the Effectiveness of Interview Skills Testing in Pre-Practical  
Evaluation System

~Self - evaluation and Client Relations of Students who took the Interview Skills ~

長濱章雄<sup>1)</sup> 栗田克実<sup>1)</sup> 任 賢宰<sup>1)</sup>

宮下史恵<sup>1)</sup> 北村満広<sup>2)</sup> 岡田智紀<sup>3)</sup>

Akio NAGAHAMA, Katsumi KURITA, Hyunjae LIM, Fumie MIYASHITA,  
Michihiro KITAMURA and Tomonori OKADA

<sup>1)</sup> 旭川市立大学保健福祉学部 <sup>2)</sup> 共同生活援助事業所共生の里

<sup>3)</sup> 上川中部基幹相談支援センター

キーワード：ソーシャルワーク実習，実習前評価システム，面接技術試験，クライアント評価

## 抄 録

コミュニティ福祉学科では、ソーシャルワーク実習と相談援助実習（旧カリ）に臨む学生の面接技術の一定水準を担保するために、実習前評価システムの導入を行っており、ソーシャルワーク実習指導において面接技術試験を導入・実施している。面接技術試験を受けた学生へのアンケート調査から、面接技術試験を受けるにあたり、その目的を理解して臨んでいること、面接技術試験の実施が実習に向けた意欲の向上につながっていることが確認できた。また、評価項目における面接技術については、「できなかった」と感じる割合が高く、自身の弱点の理解の高さにつながる効果も示されていた。また、学生の自己評価と、面接技術試験のクライアント役を担ってくれた現場のソーシャルワーカー（社会福祉士）の評価との整合性を見る限り、技術習得の不足部分は事前の実習指導や演習に関する課題として示唆された。

## I. はじめに

本学は、社会福祉士国家資格受験資格取得に欠かせないソーシャルワーク実習Ⅰ・Ⅱを卒業要件としており、全ての学生がソーシャルワーク実習に臨む。実習における教育効果を高めるためにも、面接技術の担保として客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination:以下、OSCEと表記）の実施が日本ソーシャルワーク教育学校連盟北海道ブロックにおいて推奨され、各養成校におけるそれぞれの取り組みが実践

されている。旭川市立大学においても令和3年度より北海道ブロックの基準である評価チェックリストを用いた面接技術試験が「相談援助実習指導Ⅱ」において実施されてきた。令和3年度は、covid-19の感染状況にて面接技術試験の延期を余儀なくされたため、実習前評価システムの目的に合わせて実習前に実施したのは令和4年度が最初となる。しかし、実習後にアンケートを実施したことで、回収が少なく結果の精度が十分ではなかった。今後において実習前評価システムの充実を図る意義として、学生の多様化が進み、実習

に耐えうる学生の力量をアセスメントすること、評価基準の確立の重要性が挙げられるが、OSCEにおける面接技術試験においても、臨床型のソーシャルワーク実習の形式を踏まえた面接スキルの担保としての意義が重要視されるため、多角的視点による継続した調査の必要性を感じている。

社団法人日本社会福祉士養成校協会による「相談援助実習指導・現場実習教員テキスト」で示されている6つの実習前評価のひとつに「定期的な知識試験」があるが<sup>1)</sup>、渡辺は事前知識試験(CBT: Computer Based Testing)と併せてOSCEの導入が、試験に備えて学生が学習を振り返るという効果があることを述べている<sup>2)</sup>。巻・川勾らは学生へのアンケート調査から、OSCEの取り組みに対して、9割以上の学生が目的を理解した上でOSCEに臨み、かつOSCE形式でスキルが測られることを肯定的に捉えていることを示した<sup>3)</sup>。また長濱は、OSCEによる面接技術試験を体験した学生が、相談援助実習における面接評価が高くなる傾向を示しており<sup>4)</sup>、事前に面接技術試験を実施することは臨床型のソーシャルワーク実習の充実を図る上でも意義は高いものといえる。長濱・栗田らによるOSCE調査では、面接技術試験の目的を理解しているという設問に対し、「理解できた」「まあまあ理解できた」の割合が100%となっていることで明確な目的に理解に基づき試験を受けていることが明らかにされた<sup>5)</sup>。そのためOSCEとしての充実を図るためにも今回実施された面接技術試験に対する受験学生の同試験に対する意識をアンケート形式で調査することで、学生自身の意識と教員と外部クライアント役の評価の関連から面接技術試験の有効性や課題を検討し、次年度以降の面接技術試験のさらなる充実につなげることを目的とする。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

旭川市立大学において、ソーシャルワーク実習Ⅱおよび相談援助実習(旧カリキュラム)を履修している3年次及び4年次の計27名(男女比1:2)を対象とした。

### 2. 調査方法

面接技術試験を受けた学生に対してMicrosoft Formsを使用した無記名自記式のアンケート調査(インターネット調査)を実施した。アンケートの調査は、面接技術試験日である2023年7月10日にアンケートデータを配信し、実施日から1週間の提出期間を設けた。

### 3. 面接技術試験の実施概要

学生が受けた面接技術試験は、学生を2グループに分け、役割は地域包括支援センターのソーシャルワーカーという設定であり、クライアントは、実際にソーシャルワーク業務を担っている専門職(社会福祉士)2名に依頼した。面接技術の評価は、クライアントによる評価(18点満点)と教員(2名1組)による評価(合議に基づく66点満点)の合計(84点満点)を出している。

面接時間は各ブースへのクライアントの入室から7分間とし、終了後1分で要約を行う流れとなっている。その後、クライアントと各教員よりコメントを受けて終了とし、これらを合わせた1人の持ち時間は10分とした。

### 4. 倫理的配慮

人権の擁護に対する配慮として、アンケート調査への協力は任意であり、協力しないことによる不利益は一切ないこと、無記名であること、提出されたデータは個人が特定できないように処理することを書面において説明をした。

本研究は、旭川市立大学保健福祉学部研究倫理委員会による承認を得て実施している(承認番号14-1)。

## III. 結果

アンケート調査には12名の回答を得た(回収率44.4%)。以下、それぞれの設問ごとに回答内容をみていく。

1. 実習に臨む前に自らの面接技術の水準を確認する(振り返る)」という面接技術試験(以下、試験)の目的を理解できましたか。

「理解できた」が8名(67%)及び「まあまあ理解できた」が3名(25%)で、92%の学生が面接技術試験の目的を理解していることが示されている(図1)。

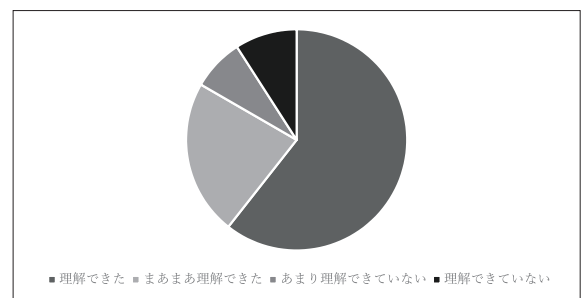


図1 面接技術試験の目的を理解できたか

理由「コメント」

- ・実習の中では、利用者の方へインタビュー面接を行う機会があると考えているため。
- ・実際に面接場面に立ってみて、座学ではわからない面接技術の課題をいくつか実感することができたから。
- ・そもそも、この面接試験では技術の水準等計れるだろうか？？いくらでも演技は出来るし、自分自身の本質とは違う部分で装うことなど可能であると推測できる。ただ、敢えて言うならば、装うという部分では自分が誰よりも出来ることは分かっているの、その再認識ではあり、装うことが面接技術であるならば目的は理解できる。なので、自分の本質をしっかり理解している先生に個人で様々なダメ出しをしてもらおう方が何百倍も価値がある。
- ・今後に活かすため。
- ・説明が丁寧だったため。
- ・実習で行う際に気をつける水準をポイントなどで可視化できた。
- ・留意する点の確認や伝え方を考える良い機会となった。
- ・適切な指摘を受けたから
- ・実習に向けて実際にクライアントを迎えて面接をするからそのために必要だと思ったから。

2. 試験への備えとして知識学習を行いましたか。

「行った」が7名(58%)、「まあまあ行った」が4名(33%)で知識学習に取り組んだ学生は91%となっている。どのような内容をどの程度実施したかの具体的な取り組みまでは示されていないが、事前の準備への意識がみられている(図2)。

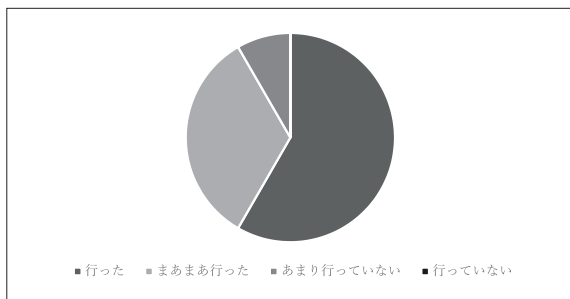


図2 試験への備えとして知識学習を行ったか

理由「コメント」

- ・試験を行う上で、何も準備をしないことは今後の自分にも影響があると思ったため。

- ・ソーシャルワーク方法論Ⅳの資料やインターネットの情報をもとに事前準備をしていったから。
- ・知識学習として、該当授業である方法論など、演習では、担当の先生は熱意ある方が多く、机上で学習は深く取り組んでいる。
- ・近づいてから焦ってしまったため
- ・実習の練習にもなるため。
- ・今までの授業のプリントを振り返ったり、他の人と確認したりした。
- ・実際の場面をイメージして援助がスムーズに進める為に行った。
- ・倫理的配慮の説明をスムーズに行えるよう十分に準備した。

3. 試験への備えとして模擬練習を行いましたか。

「行った」は4名(33%)、「まあまあ行った」は3名(25%)と合わせて、58%に留まっており、前問の知識学習に比べると取り組みづらい傾向がみられた。コメントにもあるように倫理的配慮や守秘義務を伝える練習は行いやすいが、具体的な面接の内容は事前に知ることができないことも練習につながりづらい要因といえる(図3)。

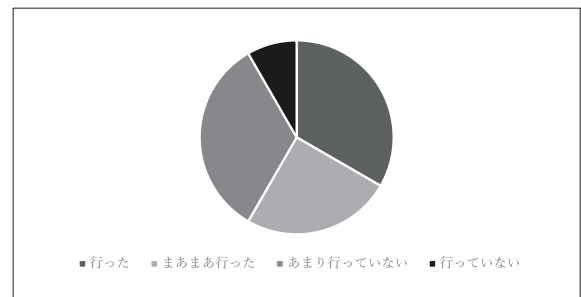


図3 模擬練習を行ったか

理由「コメント」

- ・倫理的配慮や守秘義務に基づいた文言を、言葉に詰まることなく話す為には模擬練習を行い、滞りなく話す必要があるため。
- ・友達と流れのアドバイスをし合ったが、通しの練習をすることはできなかったから。
- ・2に該当するが、そもそもの本質を装い7分間の場を回すことはいくらでもできるので、その点で模擬練習はほとんど必要ないと思っている。そこを考えると模擬演習としての部分での学習よりも、社会福祉士の専門性に対する追求を学ぶ方がいくらかも有意義だと考えている。

- ・数回しかできなかった
- ・他のことをしていたため。
- ・学生同士で行った。
- ・面接を実際行ったことがなく不安があった為、一連の流れや質問の確認を行なった。

#### 4. 試験によって自身の弱点を明確化できましたか。

「明確になった」は10名(83%)で、「まあまあ明確になった」は2名(17%)と全員が明確になった部分を見出すことができている。これは実際の面接体験に対して、クライアント役および各ブース2名の教員評価者からのフィードバックが根底にあるとされる(図4)。

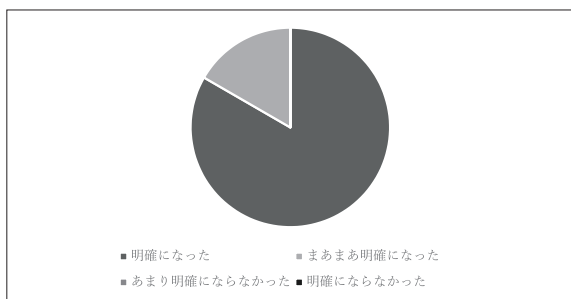


図4 自身の弱点を明確化できたか

#### 理由「コメント」

- ・相談内容であった父親の事と、家族の事で話が散らかってしまったため。
- ・緊張で質問が途切れてしまったことや面接後のアドバイスのため、弱点が分かった。
- ・弱点があるとすれば、飄々とこなしてしまうことだろう。想定される方向性に自ずと持っていくようなことをしてしまっていると思う。これは、社会福祉士の専門性に完全に逸脱している状態であり、【クライアントと共に】を実践出来ていない。
- ・アドバイスをいただいたため。
- ・先生から足りていない点を指摘されたため。
- ・自分でも、相手からも思う課題がわかった。
- ・使い慣れない言葉や緊張から不十分な部分を確認できた。経験を重ねることや他の人を参考にしていきたいと思った。
- ・相手からの答えに対してもっと深く聞くことができたと思ったから。
- ・先生からの指摘と自分の振り返りによって改善すべき点を理解した。

#### 5. 試験によって自身の強みを明確化できましたか。

「明確になった」は3名(25%)、「まあまあ明確になった」は6名(50%)と合わせて75%の学生が、自身のストレンクスを見出しているが、「あまり明確にならなかった」「明確にならなかった」学生が25%となっている。弱点と比較して取り組みの効果が強みとして得られていない学生が25%の割合であることは、フィードバックの課題であると同時に試験であることから、学生自身の課題に目が向きやすい傾向とと思われる(図5)。

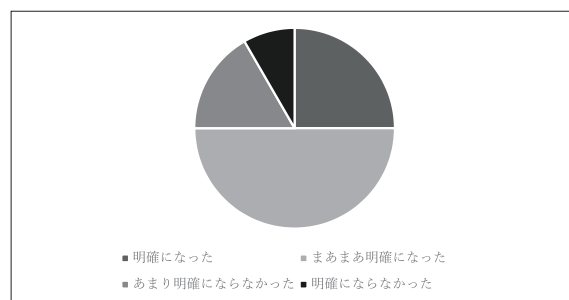


図5 自身の強みを明確化できたか

#### 理由「コメント」

- ・基本的な姿勢などを褒められたため、その部分をきちんと理解したため。
- ・面接への取り組みについて褒めていただけたので、そこは継続していきたい。
- ・クライアント役には緊張していたか??と聞かれたが、全く緊張することもなく、シナプスを張り巡らして展開を何歩も先を想像出来る頭脳。
- ・褒めてもらったから。
- ・先生に褒めてもらったため。
- ・しっかり話できることがわかった。
- ・丁寧に話しを聞くことができた。
- ・結局なにが自分の強みなかわからなかったから。
- ・上手くできた部分は強みだと考える。

#### 6. 試験時間(7分)はどのように感じましたか。

「長く感じた」は2名(17%)、「どちらかと言えば長く感じた」は3名(25%)と合わせて42%の学生が長く感じているが、半数以上の58%の学生が7分間を短く感じている。面接時間を短く感じている学生は面接の展開に不十分さを感じていることもあり、今後の面接時間の検討の必要性も感じられる(図6)。

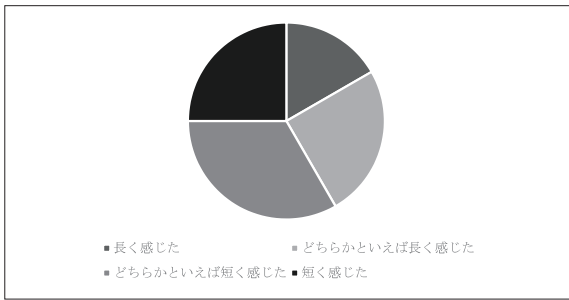


図6 試験時間をどのように感じたか

理由「コメント」

- ・試験前は絶対に続かないと思っていたが、始めてみると意外と早く終わった感じがした。
- ・今回の試験は7分と設定されており、評価方法も提示されているので、ギリギリ評価を良い方向にもっていくため、始めの倫理的配慮までの時間をしっかりと計算した。故に、引き伸ばしたので、主訴まで聞いて、少し深掘りをするぐらいで留めたので、深掘りという意味では短いかもしれない。

- ・最後の方は質問が出てこなかった。
- ・まだまだ質問したい項目があったため。
- ・緊張していたから。
- ・知りたい情報が多くあり時間が短く感じた。
- ・ちょうどよかった。
- ・問がスムーズに行えなかったため。

7. 試験において以下の各項目を実践することはできましたか。

評価項目ごとに「できた」「できなかった」の自己評価を聞いているが、1のクライアントの迎え入れる態度から4の初めの挨拶と自己紹介までは、「できた」と感じている学生は多い。質問が開始されてからの面接の技法においては難しさを感じる割合が高くなっている。「できなかった」が半数を超えている項目は、「質問技法の的確さ」と「焦点の当て方」が75%、「反映技法」と「主訴の要約」が66.7%、「身体技法」と「ワーカー側が沈黙に陥らないこと」が58.3%、「語りの促進」が50%の順となっている(図7)。

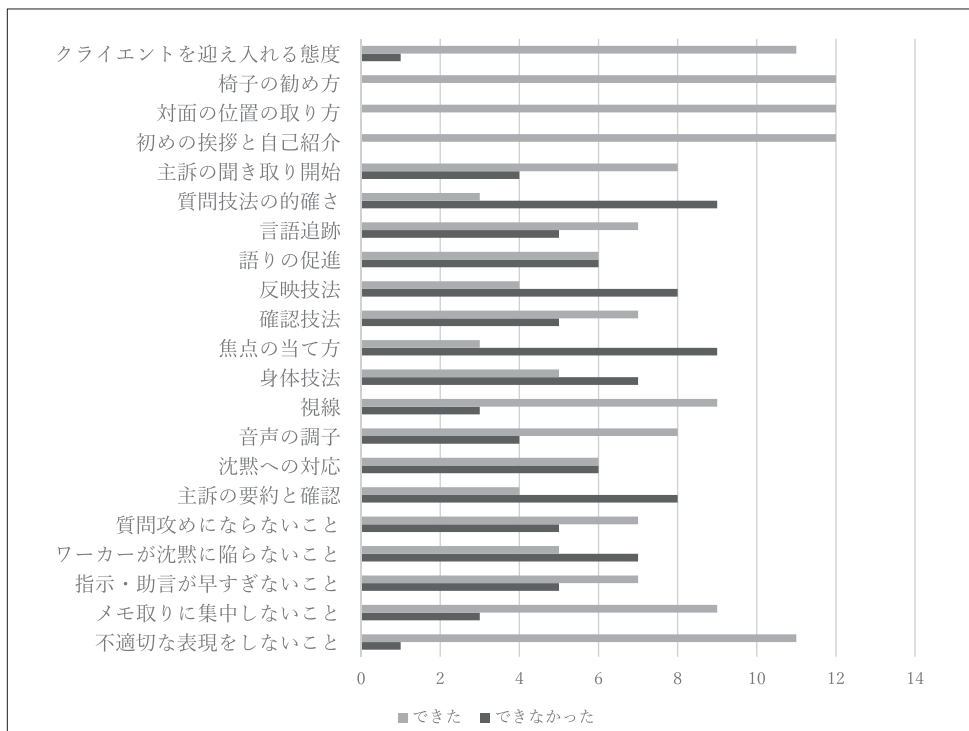


図7 試験において(各項目を)実践できたか

8. 試験のクライアント役を現場の社会福祉士が行ったことで臨場感は高まりましたか。

「高まった」は9名(75%)、「まあまあ高まった」が2名(17%)と92%の学生が臨場感の高まりを感じている。クライアント役は現場の社会福祉士であり、日常的な接点がない人が対応するということが、臨場感につながっているものと思われる(図8)。

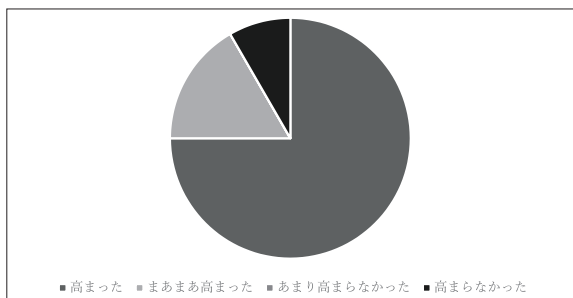


図8 現場の社会福祉士が行ったことで臨場感は高まったか

理由「コメント」

- ・他の人の話を聞いていると自分の時とは異なった場合があったので、多様な人との関わりがあったご自身の経験から多様な人の対応ができたのではないかなと感じた。
- ・やはり想定した優しいものであるもので、あれでは臨場感はない。
- ・緊張感も高まった。
- ・緊張感があり、ちょうどよかった。
- ・本当にありそうなケースだったこともあり、本番の緊張感が凄かった。
- ・雰囲気や回答から実践場面と近いように感じた。
- ・実際に面接をしている人がクライアントだと実際に体験しているクライアントになってもらえるので、ほんとにクライアントに対応している感じがあったから。

9. 試験を受けることにより、実習の取り組み意欲の向上につながりましたか。

「つながった」は7名(58%)、「まあまあつながった」が4名(33%)と91%の学生が実習に向けた意欲の向上につながったと回答した(図9)。

理由「コメント」

- ・次回は今回の改善点を意識して行おうという目標ができた反面、実習で面接場面があれば相手の方は何も知らない状態なので、もっと難しいのではないかなという不安も感じた。

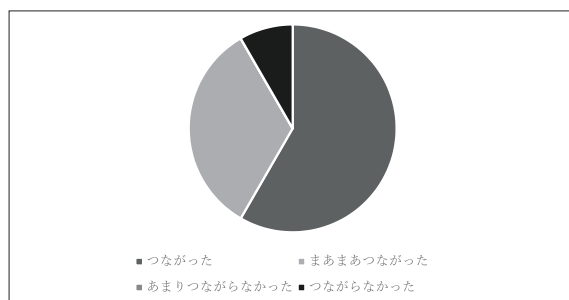


図9 実習の取り組み意欲の向上につながったか

- ・この試験を受ける事より尊敬する先生の社会福祉士の専門性を間近でみて学習を深めるほうがよっぽど有意義である。また、この試験の為の演習的な授業、ここでいうならソーシャルワーク演習か??あれは、事例検討が多すぎて、この面接を想定したものとは全くないと言っても過言ではない。それでは、礼節という部分での学びなどの深さは深堀できないのではないか。
- ・これを生かしていきたい。
- ・モチベーションが高まったため。
- ・幾分かはいい意味で緊張感が解けたが、不安に思う部分も出た。
- ・指導者の援助を参考にし、より良い援助ができるようになりたいと思った。
- ・実習でもやる面接に繋がったと思ったから。

## IV. 考 察

回収率が低く(44.4%)、調査結果の精度に課題が残されているが、面接技術試験実施直後に、調査を実施したことで、実施後に感じた各自の自己評価となっている。

設問1は、今回の試験に対する目的理解であるが、91%の学生が理解した上で面接技術試験に臨んでいることが示されている。しかし、この設問は実習前評価システムとして、日本ソーシャルワーク教育学校連盟北海道ブロックにおいて推奨されていることを考えると、面接技術試験の意義については、全学生が必要を理解できる事前の説明が重要と思われる(前回調査は、「理解できた」「まあまあ理解できた」の回答が100%となっている)。

設問2は、事前の知識学習の有無であるが、91%の学生が何らかの取り組みを行っており、面接技術試験に向けた意識が感じられる。前回調査では、75%であったことから意識の向上が感じられている。

設問3は、模擬練習であるが、設問2の知識練習に比べると、十分な学習につながっていない結果が見られる。何らかの取り組みを行った学生は58%であり、前回の62.5%を近い数値となっている。「行っていない」という学生は1名であり、「あまり行っていない」という学生が33%となっており、十分な練習ではないが、何らかの取り組みを行った学生がほとんどといえる。

設問4は、面接技術試験に臨む学生自身の弱点の明確化があるが、この設問では、すべての学生が何らかの弱点を感じることができている。コメントを見ると、今後に向けた課題として捉えているものと思われ、弱点から意欲の低下につながるものではないと感じる。

設問5は、75%の学生が、「明確」もしくは「まあまあ明確」に、自身の強みを感じることができているが、25%の学生はこの機会を通して、強みを感じることができていない。自身のストレンクスを感じることは、設問9の意欲の向上に対しても重要な設問といえる。クライアント役による評価と教員による評価の両面において、ストレンクス視点での評価の実施が問われるものといえる。

設問6は、7分の面接時間を長く感じた割合が42%と半数以下であり、この結果も前回調査(37.5%)と同様になっている。今回は30秒延長し、面接時間が7分となっているが、半数以上の学生は短く感じている。通常の面接では7分で終了することはあり得ない時間配分である。「まだまだ質問したい項目があった」「知りたい情報が多くあり時間が短く感じた」などのコメントは時間の長さに対する典型的な意見といえる。試験であるため、最終的な面接の終了を目指すものではないため、試験に臨む学生が自身の力を発揮できる適切な時間として、「長く感じた」「短く感じた」の回答が極端にどちらかに片寄っていないため、ある程度バランスのとれた時間と思われる。

設問7は、面接技術試験で評価される項目に対する自己評価になるが、「できなかった」という自己評価が50%を超えているのは7項目で、前回調査の6項目と割合的にはほぼ同様であるが、項目の違いが見られている。前回調査と共通して「できなかった」と答えている項目は、「質問技法の的確さ」「反映技法の的確さ」「主訴の要約と確認の的確さ」「ワーカー側が沈黙に陥らなかったか」の4つである。これらの項目については、知識・技術の向上として、ソーシャルワーク方法論や演習などの連動性を高めていく必要がある。昨年は50%超えなかったが今回の調査で50%超

えた項目としては、「語りの促進の的確さ」「焦点の当て方の的確さ」「身体技法の的確さ」となっている。特に「身体技法の的確さ」については、前回調査で0%であったものが、今回は58.3%ができなかったと回答している。これは、学生自身が気づいていないペンを必要以上に触るなどの、クライアント側が気になる行為をコメントにおいて評価を受けていることに影響されているものと思われる。前回調査で50%超えたが今回は超えていない項目は、「早すぎる指示・助言等は無かったか(41.3%)」となっている。

設問8は、今回の調査で初めて設定した問いであるが、91%の学生が臨場感につながる結果となっている。クライアント役を誰が担当かは、先輩の学生が実施するなどいろいろな考え方があがるが、限られた面接時間のなかで、より実践性の高い進行を意識できるという点では、現役のソーシャルワーカー(社会福祉士)による効果の高さがうかがえた。クライアント役からの取り組んだ感想として、日頃の実践を意識しながら面接に対応したことが述べられている。

設問9は、ほぼ前回調査と同様の結果であり、総体的には面接技術試験が意欲の向上への効果につながっているものの、全ての学生に対して意欲の向上につながってはいない。

## V. まとめと今後の課題

本学における面接技術試験(OSCE)の取り組みは今回で3回目となる。1回目はコロナ禍の影響で実習後に振り返り的な位置づけとして実施されているため、実習前評価システムとして機能した試験としては2回目となる。昨年のアンケート調査は、実習後に実施し、「面接技術試験」が相談援助実習において効果があったかを加えた設問としており、面接技術試験直後に学生がどのような意識をもったのかは今回の調査が初めての確認となる。

面接技術試験の目的理解(設問1)と実習に向けた意欲の向上へのつながり(設問9)の自己評価の高さから、面接技術試験の必要性と実習への意欲の向上の高さは、面接技術試験の役割としての基本的な意義は果たされている。併せて面接技術試験の効果の視点では、設問2の「事前の知識学習」、設問4の「弱点の明確化」、設問8の「面接の臨場感」において効果は特に高い。

設問3の「事前の模擬練習」、設問5の「強みの明確化」については効果につながる自己評価の向上が課

題といえる。

自身の弱点、強みのいずれにおいてもどれ程、客観的な視点を持って自身を評価しているかは重要な点といえる。これは設問7における自己評価の項目とクライアントから見たソーシャルワーカーの実践への評価との対比で見えていく。現場のソーシャルワーカー（社会福祉士）であるクライアント役は、クライアントとしての役割と合わせて、クライアントとしての視点での評価を実践している。

評価項目は6項目であり、カッコ内は3点満点における平均点となる。

1. クライアントは、気持ちよく迎えられたか (2.9)
2. クライアントは、ソーシャルワーカーの役割を理解できたか (2.9)
3. クライアントは、滑らかに相談関係に入れたか (2.9)
4. クライアントは、相談事を十分に聴かれたと感じられたか (2.4)
5. クライアントは、相談事を十分に話したと感じられたか (2.7)
6. クライアントは、相談事を十分に理解されたと感じられたか (2.4)

このクライアント評価の結果をみると、面接に入るにあたり、概ね気持ちよく迎え入れられており (2.9)、ソーシャルワーカーの役割を理解して (2.9)、滑らかに相談に入れている (2.9) ことがうかがえる。その後の展開として、十分に相談事を聞いてもらえたかの評価が下がっており (2.4)、十分に話したかでは評価が上がるが (2.7)、相談内容が理解されたかでは評価が下がっている (2.4)。

クライアント評価で学生に示された評価記述からは、「クライアントの心の揺れに対しての共感があれば尚よい」「クライアントの心の動きに対して、相談者も少々感情を出してもよいと思う」「クライアントの抱える心の動きを捉えて、共感してもらいたい」「話のペースが少々早いので、クライアントがそのペースに巻き込まれてしまう感じがした」「質問数自体が乏しくクライアントとしては相談したい事を話して良いか悩ましかった」「面談中はテンポが良すぎてクライアントが話し終わらないうちに学生が言葉を重ねる場面があり、十分に聞いてもらえないと感じた」「相談内容を十分に話せていないにも関わらず、学生からは今後の提案があった」「途中の沈黙やクライアントの回答に対して無反応のまま次の質問に移ってしまったため、話を

聴いてくれているのか不安になった」などの十分に話せていないことに触れたコメントが述べられている。

これらのクライアントの評価結果は、学生の自己評価における、相談の導入部分の評価の高さと、できなかったと感じた「質問技法の的確さ」と「焦点の当て方」、「反映技法」、「主訴の要約」、「身体技法」、「ワーカー側が沈黙に陥らないこと」、「語りの促進」の項目に関する評価との関連性がみられる。クライアント役と面接技術試験を受ける学生の接触は、この場が初めてであり、学生の事前情報からの先入観はクライアント役に入ってはいない。現職のクライアント役は、臨場感を生み出すとともに、クライアント視点での評価の客観性の高さにもつながっているもの言える。

面接技術の結果を見ていくと、迎え入れから主訴の切り出しまでの前段（評価項目1～4）と、面接におけるソーシャルワーカーとしての対応（評価項目13～21）は高得点の傾向にあるが、面接技法においては得点が低い傾向が見られている。これは前回の面接技術試験における、長濱・栗田らによるまとめでも同じ傾向があり<sup>5)</sup>、杉本・上原も実習前評価システムにおける構造化面接の課題として「身体技法の高得点化、及び面接内容の主訴の要約、質問技法の低得点化」を挙げており<sup>6)</sup>、質問技法をいかに事前の知識や技術の習得として事前の学びにつなげていくかが今後の課題として問われている。

## 注釈・引用文献

- 1) 社団法人日本社会福祉士養成校協会編：相談援助実習指導・現場実習教員テキスト、201、中央法規出版、2009
- 2) 渡辺央：相談援助実習の実習前評価についての実態、東京成徳大学研究紀要－人文学部・応用心理学部－、20、165-172、2013
- 3) 巻康弘・川勾亜紀奈・福岡麻紀・近藤尚也・大友芳恵・鈴木幸雄：相談援助実習におけるOSCE（客観的臨床能力試験）の開発～実施結果と学生アンケート調査から～、北海道医療大学看護福祉学部紀要、21、1-10、2014
- 4) 長濱章雄：相談援助実習におけるインターク面接に与えるOSCE（客観的臨床能力試験）体験の効果～チェックリストを用いた技術評価からの考察～、最新社会福祉学研究、14、85-92、2019
- 5) 長濱章雄・栗田克実・任賢宰・宮下史恵：相談援助実習における実習前評価システムの検討－面接技術試験を受けた学生へのアンケート調査から－、旭川大学保健福祉学部研究紀要、15、7-14、2023
- 6) 杉本大輔・上原正希：実習前評価システムに関する一つの考察V、星槎道都大学研究紀要社会福祉学部、2、83-97、2021